

北陸農政局「食育月間」令和4年度「食育推進」イベント 概要

○開催日時：令和4年6月23日（木曜日）13:15～16:00

○開催場所：北陸農政局 1階 共用大会議室（Zoom配信）

○参加人数：会場【第1部】受賞者5名（1名は都合のため欠席）

【第2部】9名（NP0エコラボの代表者、第1部受賞者5名、北陸農政局3名）

オンライン一般視聴回線数129回線（1回線を複数人で視聴の場合もある）

（オンライン一般視聴申込回線数159回線）

本イベントはコロナ禍に配慮し、受賞者を会場に招き、申込みいただいた視聴者にイベントの様子をオンライン（Zoom）でライブ配信した。

【第1部】第1回北陸農政局食育活動表彰 表彰状授与式

北陸農政局は、管内（新潟県、富山県、石川県、福井県）における食育関係者の取組を対象として、その功績を称えとともに、その取組の内容を広く周知し、管内の食育活動の更なる推進を目的として、「北陸農政局食育活動表彰」を実施した。

「食育推進」イベントの第1部において、第1回北陸農政局食育活動表彰 表彰状授与式を行った。内島局次長が式辞を述べた後、表彰状を授与し記念撮影を行った。

※上越市立大瀧（おおぶけ）小学校は欠席。

○受賞者の皆さま（詳しくはこちら：[事例集](#)）

- ・西蒲区農村地域生活アドバイザー連絡会 岩室地区
- ・上越市立大瀧（おおぶけ）小学校
- ・コミュニティカフェ・カフェゴッコ
- ・北陸学院大学短期大学部ミッション食育グループ
- ・中島 早苗
- ・あわら市食生活改善推進員連絡協議会



受賞者の皆さま

【第2部】「とくだねe～講座」食育月間編～食育活動を通じて更に伝えたいこと～

第1部に引き続き、受川消費生活課長進行の下、「とくだねe～講座」食育月間編として、「食育活動を通じて更に伝えたいこと」をテーマに第2部を開催した。

第6回食育活動表彰で農林水産大臣賞を受賞したNP0エコラボ理事長の中村 早苗氏（以下、中村氏）からの受賞報告や第1部における受賞者からの活動紹介の後、オンライン参加者も交えて意見交換を行った。

○受賞報告

第6回食育活動表彰 教育関係者・事業者部門【教育等関係者の部】において、農林水産大臣賞を受賞した、NP0エコラボの中村氏が、「地域資源とマネジメント視点を活用した 体験型環境食育の推進～食の環境負荷を低減し価値を高める食育～」と題して、受賞報告を行った。



農林水産大臣賞 受賞報告

NP0エコラボが実施している「環境配慮型農業の体験」についての説明や、「食に関わるエネルギーの削減」を背景とした、環境負荷の少ない地産地消について考える伝統食調理実習や再生可能エネルギーを活用したソーラークッキングの開催等についての説明があった。また、食材の購入や保存方法等の身近な行動を例にマネジメントの視点で食材を管理する、「食の廃棄物発生抑制と資源循環」についての説明があった。今後の展開として、カーボンニュートラルを促進するための食育活動やコロナ禍において、食が社会のつながりを深める役割を果たしてきたことを再確認するとともに、持続可能な食に思いを深めたい、と語った。

〇活動報告

〈西蒲区農村地域生活アドバイザー連絡会 岩室地区 担当 阿部 マサ子 氏〉（以下、阿部氏）

私たちは、地域農業の振興と農村女性の活躍促進を目的に新潟県が認定した新潟県農村地域生活アドバイザーである。活動の一つとして、和納小学校の全学年を対象に、児童の成長段階にあった食育・農業体験活動を21年間にわたり取り組んでいる。食を通じた地域文化の理解、農業者等との交流により子ども達の豊かな人間形成の一端を担っているという気持ちで取り組んでいる。今後、高齢化する会員の後継者を育てると共に自らの技術力向上を心がけていきたい。



〈コミュニティカフェ・カフェゴッコ 代表 広野 美代子 氏〉（以下、広野氏）

その土地で採れた農産物を食べるとエネルギーをもらい元気になるということを伝えるために料理教室を開始した。「野菜くずドレッシング教室」は、地元の旬の野菜の美味しさ、生産者が丹精込めて作った農産物を大切に思う心などを理解しやすく、野菜の皮まで残さず使うことは環境配慮にもつながっている。また、生産者と協力し出張朝市や農業体験を行い、消費者と生産者の橋渡しを行っている。今後は、更に内容を濃くし、家庭内の問題に関する講座も含めた活動を行いたい。



〈北陸学院大学短期大学部ミッション食育グループ 代表 新澤 祥恵 氏〉（以下、新澤氏）

本学学生の学びの一つとして、地域の食材を使い地域と連携した食育活動を実践している。金沢市農業センターの協力により金沢市医王山地区の「青かぶ」の地域活性化事業を開始した。最初は規格外の青かぶを活用し、学生・生産者・農業センターそれぞれがレシピを考案しレシピ集を作成した。2019年度はかぶら寿し作りを実施し、各家庭での作り方等の情報交換などを行った。2020年と2021年は市民を対象とした講座をコロナ禍のためオンラインで開催したが、今年は対面でかぶら寿し作りを開催したい。



〈中島 早苗 氏〉 （以下、中島氏）

幼稚園の講座は、子どもと家族が家庭でも一緒に食育をできる工夫をしている。災害時ごはん活動はニーズが多く、災害時でも簡単・美味しい・栄養豊富・できれば温かい物を食べてもらいたいと思い、講座を開催している。コロナ禍でのデジタル化をいち早く取入れており、リアルとオンラインにより開催した公民館での講座は、特に評判が良かった。行政と大学と生産者が上手く機能していけば素晴らしい発想が生まれると思っている。SNSを活用した食育活動も今の時代では必要だと考えている。



〈あわら市食生活改善推進員連絡協議会 会長 浅野 壽恵 氏〉 （以下、浅野氏）

食生活改善推進員は、「食で育む豊かな心と健やかな身体」を基本理念に、食を通した健康づくりをサポートするボランティアとして活動している。小中学生を対象とした活動としては、朝ごはん応援プロジェクトがある。親子を対象とした活動としては、「おばあちゃんの味の日」の試食会でレシピの紹介をしている。働く世代を対象とした活動としては、レシピの紹介・配布、生活習慣病予防のお話を行っている。今後は、更に活動を充実させ、隣の坂井市の食生活改善推進員と合同で講習会や勉強会を行いたい。



会場出席者の間にパーテーションを設け、出席者にはマスクを取りお話をいただいた。



第2部会場の様子

○意見交換（抜粋）

消費生活課長：皆さんの取組紹介について、さらに聞いてみたいことはあるか。

中村氏：北陸学院大学短期大学部の青かぶの活動モデルが、全市に広まる可能性はあるか。

新澤氏：金沢市にはかぶを作っている農家さんは多くいらっしゃると思うので、ほかの農家とも連携し、様々なかぶを使って活動ができると面白いと思う。

新澤氏：NPOエコラボさんの団体が自発的に行う活動と依頼を受けて行う活動の割合はどれくらいか。

中村氏：どちらも主の活動であり、自分たちがしたいことを最優先にしている。参加者が増え、個人同士のつながりが増えたことで依頼も多くなってきた。



意見交換の様子（左：新澤氏、右：中村氏）

視聴者：環境や食に関心の薄い若い世代が食育に興味を持つにはどうすれば良いか。

中村氏：見せ方が大事。SDGsやカーボンニュートラル等の概念に興味を示す傾向にあると考える。チラシや文章よりSNSに特化した宣伝が若い世代につながると感じる。

消費生活課長：コロナ禍で行う食育活動における苦労や工夫はあるか。

阿部氏：調理等はできなかったが、田植え、大豆やさつまいも植え体験は実施できた。今後は調理をする機会を作りたい。

広野氏：体験や料理教室はできなかったが、消費者とコミュニケーションが取れるSNSを新たに開設し、料理等の悩み相談に乗る活動をした。また、生活困窮者が増加したと感じたためフードバンクの活動に新たに参加した。個人宅を訪問し、簡単料理を教える活動も行った。

中村氏：屋外や風通しの良い施設において注意を払い活動を行った。オンラインの活用が難しかったため、今後再挑戦してみたい。中島さんはどのようにされているのか。

中島氏：オンラインの活用については行政からの支援があった。しかしオンラインの場合、視聴者の顔を見られない場合もあり、反応が分からず、講師としてのモチベーション維持が難しいと感じた。



意見交換の様子（左から浅野氏、中島氏、新澤氏）

新澤氏：オンラインの料理教室は、10人程度であれば問題なく実施できた。対面においても感染予防のため調理前の消毒や手洗いの徹底が大変であったが、そのような習慣ができたことは、学生や参加した子どもたちの勉強になったと感じた。

浅野氏：対面の際には参加人数を減らし、会場の工夫を行って可能な範囲で活動を行っている。また、学校訪問ができない代わりに、オンライン動画を作成した。

局次長：「身土不二」を地でいく活動報告もあったが、消費者側に地域の農業の生産構造を変える力があると思うことはないか。

広野氏：消費者と農家が意見交換できる機会は設けているが、地道な活動のためどのくらい農家側に響いているかはわからない。

中村氏：金沢市では“家庭の食卓のご飯“が魅力的であると感じる。地域の外から来た人たちはその魅力を感じるが、地元の人はそのご飯が普通であるため、魅力を感じにくい。ここに集まっている皆さんで連携し、それぞれの地域の魅力を発信していきたい。



意見交換の様子（左から中村氏、広野氏、阿部氏）

局次長：本日お集まりの皆さんは全員女性でいらっしゃるが、食育活動への男性参加状況はどうか。男性がどう参画すれば推進力が増すか。

阿部氏：和納小学校は男性の役員が多く、田植えや稲刈り等と一緒に取り組んでいるためこれから平等に取り組んでいきたい。

広野氏：親子料理教室に参加する男性の割合は2割か3割程度。まずは料理を作るのは女性の仕事という固定概念を変えていく必要があると感じているため、チラシ作成の際に工夫することが今後の課題である。

中村氏：第6回食育活動表彰の表彰式においても、男性主体の団体が受賞していた。多様な人が食育活動に参入すればするほど、食育活動が膨らむという希望を持っている。

新澤氏：以前、男性向けの料理教室を開催したが、家庭において料理をしている男性の割合は少ないと感じた。食育活動に参入する男性が増加すると、さらなる食育活動の発展につながると思う。

中島氏：小・中学校の調理自習では、男子生徒へ料理に興味を持ってもらうよう呼びかけを行っている。

浅野氏：男性のための料理教室を開催している会員から話を聞くと、参加する男性は興味や関心を持って丁寧に料理に取り組んでいるとのこと。男性も料理をする必要があるということを広く周知する機会が必要である。

消費・安全調整官：農林水産省で策定した「みどりの食料システム戦略」においても、食育の推進は重要な取組である。北陸農政局としても、皆さんと一緒に食育の推進に努めていきたい。